

## ブラウン神父とメイズリーク警部

——又はG. K. チェスタートンとK. チャペック——

飯 島 周

### ( I )

多少なりとも探偵小説に興味のある読者なら、ブラウン神父を知らぬ者はあるまい。大きな黒い帽子をかぶり洋傘を持った小柄で愛嬌のあるこの聖職者が、あまり冴えぬ動きと思いがけぬ洞察で事件を解決する鮮かさは、多くの人に強い印象を与えている。しかし、メイズリーク警部と聞いて、頭をかしげる人も少なくないであろう。この人物は、K. チャペックが、推理短篇集『ひとつのポケットから出た話』(*Povídky z jedné kapsy* 1929)<sup>①</sup>で登場させた“眼鏡をかけた、若い”“精力的な”そして何よりも仕事熱心な大学出の警官である。この若者は、その出发点となった「メイズリーク学士の場合」(“Případ dra Mejzlika”)の中で、偶然、予感、直観などと呼ばれる説明困難なある力によって、自分自身がある事件を解決したことに悩む。それは、犯罪解決には「何等かの組織的方法が必要だ」と信じていたからである。組織的な方法に頼るか偶然にまかすか、細かく計算するか出たとこ勝負にするか、いわば論理を信ずるか運命に頼るかの精神的葛藤は、誰にとっても行動選択の際に問題となり得る。前者は積極的な科学的発見、発明による快的な生活向上を経て窮極的には世界の全面的破壊に通じ、後者は神又は自然の摂理にすべてをゆだね、素朴な生活を楽しみ守る態度に進んで行く。これは極めて普遍的な人間生活の問題であるが、チャペックの主要な作品には、この主題が大きく影を落しているように思われる。

やがて若きメイズリークは、数々の事件を経験する。たとえば「詩人」(Básník)では、交通事故の目撃者である若い詩人が作った詩の文句の中に潜む手がかりによって、犯人の車を見出す。又警部となって仄筆で

登場する「レシート」(Kupón)では、残された証拠品のポットによって、その使用者の住む範囲を推定する。これらの経過は、明らかにその成長過程を物語るものである。

それに反し、ブラウン神父は最初から出来上っている。登場早々に怪盗フランボウを屈服させて、正義の味方である頼もしい探偵に変身させ、ちょこちょこ飛び廻っては難事件をあっさり解決する。(このモデルになったのは実在の神父で、一筋縄ではいかぬ著者に強い影響を与え、遂に英国国教からカトリックに改宗させたほどの人物であった。)ブラウン神父には、メイズリーク学士のような悩みは無縁、又はすでに解決済みである。そして、この点で、それぞれの背後に控えている二人の作家、チェスタートンとチャペックの明確な対比が可能であろう。

## (II)

周知の如く、チェスタートンは、G. B. ショーおよびH. G. ウェルズとは全く対立的な立場であった。チェスタートンの著作の大部分は、必ず誰かを攻撃する内容を含んでいるが、ショーとウェルズのどちらかに対する批判が圧倒的に多いのは確かであり、いかに論争を好んだにしても、いささか異常である。極端な言い方をすれば、チェスタートンにとって鼻持ちならなかったのは、ショーの超人思想とウェルズの進歩主義であった。ショーの有名な逆説もチェスタートン流に考えれば陳腐極まるものであり、ウェルズの学識は浅薄な自己顕示欲に過ぎない。

ところが不幸なことに、チャペックは、1924年のイギリス訪問に際して、この三人の作家との親交確立を望んでいた。(この間の経緯については、拙稿「カレル・チャペックと『イギリスだより』」本誌第5号—1976—を参照されたい。)ショーおよびウェルズとの個別的会談はそれぞれに実現し、それなりに満足を与えたが、チェスタートンとは正式の昼餐会以外には遂に顔を合わす機会がなく、チャペックにとっては全く心外の結果に終わったのである。

### (III)

チャベックの親友であった英文学者のO. ボチャドロの証言<sup>②</sup>によれば、チャベックはこの三人のなかでも、チェスタートンを特に好んでいたらしい。その作品にちなんで、ロンドン滞在中わざわざノッティング・ヒルに下宿し、帰国後も連絡を怠らず、何度もブラハへの招待状を送った。それに対し、チェスタートンは、1925年初頭に来て欲しいという三度目の手紙にやっと返事をしたが、これは結局断り状で、理由の一つは『G. K. ウィークリー』の創刊で多忙だからとなっている。ところが、実は1925年春、チェスタートンはポーランドのワルシャワを訪問していた。このニュースはもちろんブラハにも伝えられたが、チャベックはそれでも期待を寄せ、さらに同年3月18日付の手紙で、ブラハのペンクラブの賓客として招待する旨を連絡し、当年秋にでも来れないかと問うている。

しかしチェスタートンは、同年もその翌年もブラハに姿を現わさず、しかも1927年には再びポーランドを訪問したのである。ボチャドロの注意でそれを知ったチャベックは、ワルシャワのペンクラブを通じて、帰途ブラハへ寄るように要請した。これには返答がなく、チェスタートンが何等かの理由でブラハ訪問を避けていることがわかり、遂にチャベックもチェスタートンを“悪い奴”(chlap špatná)と呼ぶようになった。そしてその年の末になると“悪い奴”は自分の週刊紙を反チェコ宣伝に利用させるようにさえなった。ボチャドロの推測では、チェスタートンがチェコに好意的でなくなったのは、ポーランドで彼をもてなした連中の仕業であった。チェコとポーランドは、同じスラブ系の隣接する国家でありながら(又はあるがゆえに)、対抗心が強く、特にこの頃は領土問題で深刻な対立状態にあった。(領土問題はスロバキアとハンガリー間にもあり、結局チェコスロバキアは、ポーランドとハンガリーに挟撃されることになる。)

チェスタートン自身の態度を示すのは、彼独特の自叙伝らしからぬ『自

叙伝』(*Autobiography* 1936) 中にある次の趣旨の記述であろう。すなわち「かつての懐しきボヘミア (Bohemia) が、僅かの土地を加えて独立したばかりにボヘミアでなくなり、チェコスロバキアとなってしまったのは残念である。これからは“ボヘミアン風”という表現の代りに“チェコスロバキア風”と言わねばならないのだろうか。」この『自叙伝』中には、ポーランド訪問の印象記も入っており、やはり皮肉っぽい言葉に満ちているが、上記のように突き放した感じはない。

チャベックは『G. K. ウィークリー』の反チェコ論文に抗議し、12点にわたる反論を述べた手紙をチェスタートンに送り、自分の共和国を愛し守る戦士の態度を明らかにした。この手紙は一部修正(?)されて、編集者つまりチェスタートンの後書きつきで同誌に載せられたが、攻撃はそれで終わったわけではなく、反チェコ論文が次々に同誌上に公開されたのである。

結局、ボチャドロの断言の如く、チェスタートンに対するチャベックの気持は“叶わぬ片想い”(láska zhrzená)であった。

#### (IV)

チャベック自身のチェスタートンに対する観察は、その『イギリスだより』(*Anglické listy* 1924) 中に、チャベック自身の描いたチェスタートン昇天図に添えて次のように記されている。「(公式の席上だったので)……ただ微笑するだけだったが、その微笑はまさに他の人の三人分に匹敵する。その著作について、その詩的民主々義について、その天才的楽天性について書ければ、このたよりの中で最も楽しいものになるだろう……この人は、子供と巨人、縮れ毛の小羊と巨大な野牛とをみんな兼ねている。考え深くて気まぐれな表情の大きなブルネットの頭をしていて、一目で私の心の中にはずかしさと深い愛着を起させた……」<sup>③</sup>

又、チェスタートンの死の直後、1936年6月16日『国民新聞』(*Lidové noviny*)に出た追悼の辞「善人チェスタートン」(*Dobry Chesterton*)では次のように述べている。

「とても太っていて、とてももじもじしていて、とても生き生きとしていた；巨大な体、子供のような縮れ毛、三銃士のようなひげ、あご全体の下にあるボヘミアン・タイ。このがっちりした体格は、あのように強固な活動を日々続けていた、しかも人並はずれた繊細な精神に何か対応するものだった。おどけていると同時に騎士のように真面目な、いたずら好きでしかも限りなく賢明な、詩人の、ユーモア作家の、論争家の、哲学者の、幻想家の、そして信心深く戦闘的なカトリック教徒の精神に。決して複雑ではない人間を表現するに、こんなに多くの言葉が必要なのは不思議なことである。このような属性の豊かさは、ただ、そのペンからほとぼり出た生活の豊富さに対応するだけであろう。その尽くることなき逆説は、さまざまな思想を全く当然のものとして表現することに、祖国、信仰、民主々義、秩序および信頼のような、平凡な人生の五つの果実、つまりその持てるすべての物を、陽気にのどもと一杯に讃美したことにある。帽子か何かから兎を取り出して見せる魔術師のようだった。最もおごそかな真理と最も高貴な訴えが、そのおどけた思いやりのあるユーモアから溢れ出ている。飛びはねる哲学者であり、真理と死滅することなき人間性の尊厳にかかわる、喜びそのものでとんぼ返りを打っていた人である。彼は“平凡な、ビール飲みのイギリス人”以上の理解力を持ったり、それとは別の見方で物事を見ようと努力したりはしなかった。その代りに人間生活の単純性と保守性を、詩人としてかつ同時に使徒としての、最高にすばらしい天才をもって擁護したのである。彼の作品さえも、簡単に言えば、宗教全体とカトリック教の大きな弁護である。しかし、陰気な説教師としてではなく、陽気な信者として物語った。そこには、楽天主義、道化者のいたずら、そしてガルガンチュエ的な野放図さも縫い合されている。天国でユーモアがどのように評価されるかはわからない。しかし、天国にユーモアのための名誉ある席が少しでもあるならば、イギリス人ギルバート・K. チェスタートンは何等かの祝福されるべき段階に位置し、信仰の相違に関係なく、すべての人間世界は永久にその祝日を讃えることができるだろう」<sup>④</sup>

この追悼文の中では“悪い奴”は完全に消え去り、体格の点を除けば、ほとんどブラウン神父の性格と完全に一致するような大らかな姿が述べられている。

## (V)

チャベックはかなりの多作家であったが、それでもチェスタートンとは比較にならない。<sup>⑤</sup>しかし、後者が62才まで在世し、前者が僅か48年で生涯を閉じたことを考えれば、比例的に見たチャベックの文筆活動の範囲と量は、決して劣るものではない。もっとも、量の多少はそれほど重要なものではなく、問題はその傾向と質であろう。

詳細な論議は不可能であるが、両者ともジャーナリストとして活躍し、小説、評論に健筆を揮った。ただ、チェスタートンは詩にも手を染めたが、チャベックはほとんど詩を書いていない。その代り、チャベックは劇（と映画）に関係し、多くのすぐれた戯曲を残した。チェスタートンの劇は僅か三篇で、しかもいずれも評価は高くない。さらに児童文学や身辺雑記的な分野においても、両者についての比較が可能である。そして、日常生活の何気ない現象の中に潜む真実をユーモアをもって描き出すのは、両者の大きな共通点である。

しかし、この両者の持つ本来的な傾向は、かなり異なっている。たとえば、チェスタートンほどの才人が、なぜ戯曲を書かなかったか、又は書けなかったかについては「……彼の批評は演技なのである……」というグロス(J. Gross)の明察<sup>⑥</sup>が教えてくれる。チェスタートンは、批評に限らず、筆を取るや否や自ら昂奮して演技者となってしまう。しかも、筋書きに従順でない演技者である。仮に劇作家として稽古に立会うことがあったら、自分で舞台へ飛び上って、すべてを御破算にしてしまったであろう。チェスタートンの評論は、実際どこへ行ってしまうかわからない。彼の本拠としたホーム・ユニバーシティ・ライブラリー(HUL)の編者が、彼の名著とされる『文学におけるビクトリア朝』(*The Victo-*

rian Age in Literature 1913)<sup>⑦</sup> にわざわざ断り書きをつけたのは、題名（と恐らく出版者側の意図）と内容の不一致を案じたのであろう。

チャベックは、冷静な観察者として筋をまとめ、順を追って話を仕上げて行く。これは劇作家として、さらに SF を中心とする長篇の構成者として必要な資質であろう。チェスタートンの作品は、ブラウン神父ものにおいて意外な結末の冴えを見せるが、持続的な事件の進展を述べる点では劣る。両者に共通なのは、言語による描写の巧みさであるが、チャベックのやや控え目な表現に対して、チェスタートンは大膽極まりない。これは両者の傾向をはっきり区分する要素である。もちろん、チェスタートンの評論をすぐれたものにしてしているのは、著者の昂奮である。チャベックの劇および小説を芸術的に高めているのは、著者の冷静さである。著者の昂奮が感じられない評論ほど味気ないものはないし、著者だけが興奮している劇や小説ほどつまらないものはない。

以上について、さらに考察を進めれば、両者の精神生活の差にまで達することができる。チェスタートンは“正統と異端”、“正気と狂気”の間を、飽くなき逆説によってバランスを取りながら生活し続けて行った。この根本は“狂気を求める正気”のように思える。これに反し、チャベックの精神生活は数多くの苦悩に満ち、世の中の正常さを求める異常な努力に支えられていた。

この点は実際の作品に反映されている。チェスタートンの『ノッティングヒルのナポレオン』(*Napoleon of Notting Hill* 1904)<sup>⑧</sup> では、天空高くそびえ立つ破滅の象徴である貯水タンクは、圧倒的に優勢だった攻撃軍の理性的な屈服によって遂に破壊されずに済んだ。しかし、チャベックの『山椒魚戦争』(*Válka s mloky* 1936) では、チーフ・サラマンダーに率いられた山椒魚軍団は、遂に全世界を破壊してしまうのである。ただし、問題はその後にある。全滅を免かれたナポレオンは、遂には無意味な乱戦の末に姿を消し、山椒魚の作り出した荒れ果てた世界には、やがて新生復活のかすかな希望が芽生える。これは、一方ではチェスタートンの側の、正気又はまともである状態への恐れを示し、他方ではチャ

ベックの側の、狂気又はまともでない状態への恐れを表現するであろう。ウェルズ的な科学思想を排して積極的に宗教を守護するチェスタートンと、科学的思想を信じながらも何か神秘的な存在に救いを求めようとするチャベックとの対比とも説明できる。(さらに、この両者の背後にあるものとして、日没することなき大英帝国と、転変常なき新生小共和国を考えることが必要かも知れない。)

## (VI)

両者について比較し得ることは、まだ多く残されているが、数多くの制約のために終りを急がねばならない。

小学校時代には教師から“頭脳なし”と酷評され、大学へ行かずにあって美術学校に進み、<sup>⑨</sup> 借金申込みの前には有金すべてをはたいて最上の食事をし、縦横無尽に書きまくり当りまくったチェスタートンは、死後まで柩外れであった。その遺体があまりにも巨大だったため、階段から搬出できずに、寝室の窓をこわして道におろさなければならなかったと言う。しかし、このような破壊行為の原因になったとしても、その魂はカトリック教徒として、チャベックの描いた如く天国へと飛立ったに違いない。もちろん、真面目に祖国と人類の将来を憂えたチャベックの死後は、天国以外に落着くべき場所がない。生涯に一度しか顔を合せなかった二人は、天国でようやくゆっくり語らう機会を持ったことであろう。

In Heaven there's no beer,

That's why I drink it here. . .

(天国へ行ったらビールはないんだ、  
だからこの世で飲んでやるんだ...)

という歌があるアメリカ人に教わったことがある。だが、イギリス人の



(そしてチェコ人の) 天国にビールを置かないような、血も涙もないことを神様がなさるはずがない。そこで、天国へ行っても、チェスタートンは“平凡な、ビール飲みのイギリス人”として、三人前、いや五人前ものビールをきこしめして快気焰をあげ、温和なチャベックは、やや神経質な感じの横顔を見せながら一心にペンを走らせている。そして二人の分身であるブラウン神父とメイズリーク警部は、天国における犯罪の解決のために、地上にいた時に劣らず活發に飛び廻っていることであろう……チェスタートンとチャベックの作品は、そんなとめどない空想さえ起させるのである。

[注]

- ① 邦訳は栗栖継。『ひとつのポケットから出た話』晶文社1975。
- ② 以下ボチャドロ関係の記述は、O. Vočadlo. *Anglické Listy Karla Čapka* (カレル・チャペックのイギリスだより) 1975による。
- ③ K. Čapek. *Anglické Listy* 1924 (第27版 1970 p. 145)
- ④ K. Čapek. *Ratolest a Vavřín* (小枝と月桂樹) 1947 (第2版 1970, pp. 109—110) に再録。
- ⑤ L. J. Clipper. *G. K. Chesterton* New York 1974 によれば、チェスタートンの著作は単行本100冊余り、エッセイおよび評論約200、さらに未集の雑誌論文数百とのことである。
- ⑥ J. Gross. *The Rise and Fall of the Man of Letters* 1969(邦訳は橋口稔・高見幸郎共訳『イギリス文壇史』みすず書房1972) による。
- ⑦ 邦訳は『ヴィクトリア朝の英文学』G. K. チェスタトン著作集8春秋社。P. ミルワード師によれば、この本は上智大学における英文学の教科書として長年使用されている。
- ⑧ 邦訳は『新ナポレオン奇譚』G. K. チェスタトン著作集10春秋社。Notting Hill は nothing ill と語呂を合わせることが時に指摘される。
- ⑨ J. Sullivan (ed.). *G. K. Chesterton A Centenary Appraisal* London 1974 には、チェスタートンの絵が収録されているが、いずれも諷刺的な感じのものである。なお、同書pp. 219—239 には、P. Milward. “Chesterton in Japan” があり、興味ある読物となっている。